



金沢詩乃

五行歌集

渴

前書き的なもの

この五行歌集は1999年から2010年現在までの作品の中からとことん粗く選別した歌で構成されている。

寡作なのと2008年初頭～2010年9月くらいまで書かなかった時期もあったので、たぶん総作品数としては他の方よりは少ないはずだ。

その中から個人的に心に残ったもの、諳んじられるもの、一から投稿誌を引っ張り出すのが億劫なので手近な最近の作品などを載せてみたら、密度が濃いわりに取りとめのない選別な感もある。

機会を見て少しずつ、2冊目3冊目と記録&整理がてら作って行こうと思う。

2010年12月 クリスマスイブ一週間前

金沢 詩乃

A photograph of a bare tree with snow on its branches against a blue sky with power lines. The text 'ぬるい水' is overlaid in the center.

ぬ
る
い
水

おもいを

吸うてこそ

ことばさ

うごめく

蛭^{ヒル}みたくな

おんなの

澱みは

起きぬけに飲む

ぬるい水に

似て

半乾きの

洗濯物

ゆらり

溺れたらいいじゃない

空想の恋だって

つかれちやうよ

律儀に毎日

下着を取り替えるように

己と

向き合おうなんて

ぼろぼろの

歯ブラシ

天井向いて

横たわる私

なにひとつ叶わずに

なんもかも

嘘

全部 嘘

ただただ

自分が可愛くて

つらつと

泥沼を語る

わたし

絶望など

するかよ

恋も人生も



面白いところだけ

立ち読みして

それで

恋も人生も

わかったたつもりにする

たまにキス

時々パンチ

そして明け方には虫の息

恋は

やめられねえ

その優しい眼差しに

降参

はっは

もう馬鹿でいいや

あたし

目覚めれば

砂塵

ざらざらと

男の

肌であつた

ねえ

わたしに

触れてそして

生き様ごと

揉みしだいてみる

この

トースト

一枚分の

たかが今日に

齧^{かじ}りついていく

サラミ

血の味

鉄の味

まるかじり

一本の道を行く

どちらに行っても

崖っ淵

でも

岐路で凍えてるのも

まっぴら

頬張るエゴに

喉つまらせ

涙目

その繰り返しで

生きてゆく

熟して

崩れた箇所から

麻痺していく

さびしいって

なんなのだろ

こんな

堪え顔なんか

見せたくなかった

泣けぬ女の末路に

立ちすくむ

部屋中に

嗚咽

ころがり

居場所もなく

私 突っ立って泣いた

したたり続ける

冬の水

鼓動と重ねて

それでも

死ねない

明け方

涙の行き着く先

ひとりは

ひとりは

さむくてならない



風でいい

風がいい

描ききれなかった

想

幾度も叩きつけ

血みどろの

自画像

痛いか、と問われ

どこまでを

痛いと言うのか

わからぬまま

寝返りをうつ

おりがみを

折りながら

頬の涙を

乾かしていた

小さい頃のわたし

獣道を

さ迷うた頃

見上げる空のない

雨の夜が

一番辛かった

取り戻せぬまま

渴くがまま

この生を

燃やしていく事に

決めたの

わたしの

一切を導く

火

のような片翼を

求めて生きる

ただ前のめりに

突き抜けていく

風でいい

風がいい

生まれ変われるなら

ちょっとしたことでも痛いと騒げる。

誰一人同じ平凡などない。

失恋から、こどもの誕生から、死から、次来る季節のにおいから、

生まれるものもそれぞれで、行き着くところは皆同じ場所。

あれほど食べれなかった、飲めなかったものが

ずっと喉を通るようになり深く己の糧となる。

その瞬間が

たまらないんだぜ。

パブーの存在を教えてくれた井椎しづくさん

そして五行歌創設者、草壁焰太先生、並びに関係各位様

私の人生において、抱きしめ、慈しみ、張り倒し、どつきまわしてくれた

数々の存在に感謝を込めて。

